
ONE PIECE ~神狼に育てられし子~

神淨討魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE ～神狼に育てられし子～

【Zコード】

N4446BA

【作者名】

神淨討魔

【あらすじ】

転生物じやありません。

ワンピースを原作としたオリジナル小説。

原作の言葉とかも少し変わるかもしれません
がオリジナルの小説なので大目に見ていただきたいです。

この小説はワンピースのある村に住んでいた子供がある日突然捨てられ、神狼と言われるフェンリルに育てられ海へと出る小説です。

第1話 出会い

さて……初っ端からざひつ説明すればいいものか……

まあ、こんな始まり方で申し訳ないが、今の

オレは非常にヤガマ イ状況にあった。

とりあえず オレの名前はアレス……。

まだ5歳……だが、物事を区別することは既に完璧だ。

他の奴からは異常と言われたこともあるが、アイツらの方が

おかしい……とオレは思つてゐる。

まあ、体格は普通の5歳位の子供並だ。

ま、自己紹介は終えて、現状に戻るとしよう。

オレは、いつも通り日常の生活を終えて夜に寝た。

そして、起きた。起きたら、そこは家ではなく島の砂浜……！

海は間近……そして、起きると同時に田に飛び込んできたのは……

おおがみ
狼だ。

それも、ただの狼ではない。神狼フェンリルと呼ばれる

とんでもなく希少な狼だ。黒い毛並みを持ち知性は人間以上。

体格は大きいもので4mを超す、神聖なる獣。

ちなみに田の前にいるフェンリルは3mといったところだろう。

そして、普通の狼とは違う点が……2足で立っている。

おかげで、5~6mに見えるが、4足なら3m位だ。

そんなことはさておき、狼は狼だ。それにこんだけデカいと

オレだつてペロコと……平らげてしまつだらう。

まあ、オレは……といふか、誰だつてこの状況を見れば必然的に察するであろう。

死んだな……と。

といふか、これは異常な頭を持つてゐるオレだからの発想か?

まあ、そんな事を考へていた時にフェンリルが言葉を

発したので体がビックリ仰天してしまつたのは言つまでも無かる。

『オ前……何者ダ?』

狼というのは……まあ「オオーン」ぐらいしか言わないであらう。

しかし、やつともやつた通り、このフーンリルと呼ばれる狼は

知性は人間以上ある。言葉なんて話せるに決まっている。

……そつと分かっていても、ビックリしてしまったのは……必然的だ
るつ。

「オ……オレは、アレス……」

とつあえず、質問に答えた。

と、ここで気づいた。フーンリルの顔がなんかおかしい。

普通、獲物を見つけて食べるなら一タマツヒ

したり、舌なめずりしたりするのが普通だ。

だが、このフーンリル……

無表情なのだ。

いや、無表情と言つのは少しおかしいか？

なんかいつ……悲しいというか、そんな田で見つめてくるのだ。

そんな田を見ていたら、自然と恐怖が薄れていった。

……やはり、オレは異常なのか？

『ナゼ、コンナ所二居ル？』

「わからない……いつも通り、家で寝て、起きたらここにいた……記憶もしつかりある……」

フェンリルの質問に答えると、フェンリルは顔をしかめ、何かを考え…といつも、何かを思い出そうとしている？

『ヤハリカ……』

「？」

フェンリルの眩きに少し疑問の表情を浮かべた。

『昨日ノ夜……人間ノ夫婦ガ、ココノ海岸ニ居ルノヲ崖ノ上カラ見
カケタ……
恐ラク……オ前ヲ、ココニ捨テル為ニ来タノダロウ……
朝ニナツテ、ワシガココニ来タラ、寝テイルオ前ヲ発見シタ』

「…………」

このフェンリルは何を言つたのだろう……

オレは…なに？捨てられた？親に？

5年間、必死に育ててくれた親が？何で急に？

というか、なぜ、ここに？

フェンリルの話を聞き終えると、オレの

頭の中では疑問がたくさん浮かんだ。

いや、それが当たり前だ。

5年間も育ててきて、なぜ今まで一度も捨てなかつた?

なぜ、今になつて、こんなところに捨てた?

疑問が頭を駆け巡っていたため……オレは涙を

流してゐ事に気づくのに時間がかかつた。

「あ……あれ?……涙……?」

『.....』

フーンリルは哀れむような表情でオレを見下ろしている……

それに構わず、オレは泣き続けた……悲しかつた、さびしかつた……
つらかつた……

頭の中を疑問と感情が行つたり来たりして、オレはパニックに陥つた。

「う……あ……ああ……ああ……うあああ……」

泣きながらパニックに陥り、手足が勝手に

バタバタとなり、砂浜の砂が舞い上がつた。

『落チツケ』

このフーンリルの言葉無かつたら、オレは死になつていだらう。

パニックによつて脳に障害が起きていたかもしれない……

そして、それを止めるだけの気迫と言つか……迫力が

フェンリルの言葉にはあつた。

『落チツケ』

もう一度……フェンリルは力強く言つた。

その言葉を聞くと、なぜか心が落ち着いた。

なんでだらうか……？

この謎問、オレは一生解決できなかつた。

『トリアエズ……ワシハオ前ヲ食ツテヤロウカト思ツテイタガ
ヤメダ……』

「え？」

食つてやるつ……つて、やつぱりオレを食つ氣だつたわけ？

だけど、ヤメダ……つて

『オ前ハ、ワシガ育テヨウ』

「…………」

フェンリルが発した言葉を理解するのに少し時間がかかった。

え？なに？育てる？オレを？神聖な生き物……神の使いとまで言わ
れている

フェンリルが？

『来イ、アレス……今カラオ前ハ、ワシノ子供ダ』

「…………」

そりや、畠然としたよ……

口をポカンと開けて、立ちつくしたよ……

なに？家に帰つて食べる氣？オレを……

いや、待てよ……オレを育てて、大きくなつて

実がたつぱり詰まつたところで食つ氣なのでは！？

その時、オレの頭の中ではまた疑問が駆け巡つた。

だが……フェンリルの顔……あの穢やかな顔を見た瞬間……

そんな疑問なんて吹つ飛んだね。

「うそー」

力強くオレは返事をして、フンリルの後をついていった。

これが……オレとフンリル（父ちゃん）との出合いだった。

第2話 修行の日々（前書き）

ファンリルに出会って育てられた事になつたアレスの修行の日々を書きます

第2話 修行の日々

さて、オレがフーンリルに連れてこられたのは洞穴だつた。

どうやら、フーンリルはここに住んでいるらしい。

着くと同時に、オレはフーンリルからいこうかと

話を聞いた。

まず、このフーンリルの名前は『ガロウ』。

狼らしい名前だ。

今現在、なんと1100歳を超えるらしい。

本来、フーンリルの寿命といつのは1000年らしいが、
ここまで生きたフーンリルは超稀らしい。

そして、ここからが非常に重要だった。

この島……といっても、無人島なわけだが、強力な獣が多数いるらしい。

少なくとも、500体以上。

つまり、ここで生活していくためには、オレ自身の体を鍛えなければならない。

そこで、いろいろな技……といつか、修行の仕方を教わった。

1・毎日『2万本のパンチ』と『2万本の蹴り』を欠かさず、やる事。

2・これから少しずつ『見聞色』『武装色』の霸氣を教えるから、しっかりと覚える事。

3・六式『剃・月歩・嵐脚・紙絵・鉄塊・指銃』を覚える事。

全てが言つは簡単、やるは難しの修行ばかりだつた。

まず、2万本のパンチと蹴り……数を聞くだけで気が遠くなる……

それに霸氣……これは教えてくれるそつだから、問題ないだらう。

そして、六式と呼ばれる体術……これも教えてくれるらしい。

実際、六式はガロウが見せてくれた。

剃は瞬間移動にも似た速度で移動する体術。

月歩は空中をジャンプしたり駆けることができる体術。

嵐脚は足を素早く振り真空の刃を放つ体術。

紙絵はあるで、紙のように技をヒラヒラとかわす体術。

鉄塊は全身の肉体を強張らせ鉄の様に硬くさせる体術。

指銃は上記の鉄塊を応用させ、指を硬くして突き、銃弾のように相手を貫く体術。

まあ、こんな感じだ。

思うが、なんで霸氣や六式なんて技を使えるんだ？

聞いてみたところ……

『人間という生き物に霸氣や六式を教えたのはフエンリルだ』

と言われたが、実際はどうなのか……定かではない。

とりあえず、それは置いといて、全てに至つて

時間のかかりそうな修行だ。

とりあえず、2万本のパンチ、蹴りを毎日欠かさずやり、

『ガロウの霸氣勉強コーナーへ〇へ』みたいな感じで、霸氣を学び

かなり痛い思いをしながらも、六式を修行していった。

剃なんて、もうテタラメだ……

海の上で修行となつたが……

水に足をつけ、沈む前に次の足を……といった具合だ。

この剃さえできれば、月歩や嵐脚なんて簡単だ、と言つ」とひといが……

これ、案外むずかしいぞ！？

とつあえず……こんな感じで修行は続いた。

ガロウいわく……オレは上達が通常の人間の数十倍から数百倍に等しいらしい。

なにせ、六式は4ヶ月足らずで、だいたい会得できた。

あとは毎日の鍛錬らしい。

霸氣もそれなりに使えるようになり、拳で岩や大木を

砕いたりなぎ倒したりするのは簡単だった。

そして、一番すごかったのは……『2万本のパンチ、蹴り』だ。

パンチは、霸氣を纏わなくとも、岩や木を簡単にぶつ飛ばした。蹴りに関してだが、実はとつとガロウには秘密でプラス4万本の修行をしていた。

オレは足が普通の奴より長いので、蹴りが

役立つだろう……というオレの勝手な推測だ。

で、その威力はといふと……

これには、ガロウも驚いた……

海の上で蹴りをやつたのだが……

思いつけきつやつたら、風圧だけで小さな『津波』が起きた。

「…………」

『…………』

オレまで一緒になつてガロウとともに田が飛び出した。

後で

『何ヲヤツタ』

と聞かれ、2万+4万の蹴りの修行をしていたと話した……

怒られるのではないかと思ったが、逆に大笑いされた。

『サスガ、ワシノ息子ダー!』

とか言って、すんごい大笑いした。

……息子、か。

オレにはその言葉がなによりも嬉しかった。

そして……あつという間に5年もの歳月が流れた。

オレは10歳になった。

あれから毎日、『2万本のパンチ、6万本の蹴り』『霸氣』『六式』の

修行は欠かさずやつた。

今では、ガロウと共に、この島のボスに君臨していた。

3mを超す虎や、4mを超す熊でも、指一本で蜂の巣にできぬ。

今、鉄塊を使つたまま体を動かすといつ体術を

2年前からガロウに教わつているが

これが、また今まで一番むずかしい。

全身の筋肉を強張らせて鉄のように硬くさせる鉄塊……

これをかけたまま体を動かすなんて……ある意味、不可能に近いが

ガロウは「とも簡単にやつてみせた。

ガロウだつてできるんだから、オレだつて……！

と思ひが、やつぱりダメ……

2年たつた今でも、足一歩踏みだすのがやつじだった。

ちなみに、パンチや蹴りは音速を超えてしまつていいため……

ヴォン……やパン……などの、音は全て拳、足を出した後から来る。

完全に、音を置き去りにしてしまつたよつた感じだ。

ちなみに……蹴りの風圧はすさまじいもので……

以前、53歳の『津波』を起しちゃつた。

まあ、島とは反対側に向けてやつてるわけだから、島に轟は無いんだがな。

霸氣の方もかなり上達した。

見聞色の霸氣を使えば、相手の動きを先読みする事さえ可能になつた。

武装色の霸氣を使えば、腕や足を鉄のように硬くする事も可能。

それに鉄塊が加わることで、もはや鋼に近づ。

ダイヤモンドの硬さは……まだ無理かな?

とつあえず……今のガロウとの生活はすく楽しかった。

組手をしても、まだガロウには勝てない……

それだけの知性と強靭な体があるのであるのだ。

だけど、いつかガロウを超える……

今のオレの目標だ。

そんな感じで、オレの一口は終わった。

第2話 修行の日々（後書き）

フェンリルが霸氣、六式を人間に教えた
というのはオリジナルの仮説です。

次は『悪魔の実』です

悪魔の実（前書き）

悪魔の実編です。

悪魔の実

あれから、また3年が過ぎた。

オレ（アレス）の年齢は13歳。神狼フェンリル、ガロウの年齢は：よく分からんが、1110歳は超えてるんじゃないだらうか？

とりあえず……今、オレの目の前には唐草模様からくさもよひをした

不思議な果物みたいな物があつた。

まあ、ここに至るまでに少し時間をさかのぼってみよう。

オレは食糧の確保のため、島の駆けまわり獲物を

数匹しとめて洞穴に戻ろうとした時だった。

少し、木々の生い茂る奥の方にオレやガロウの

住んでいる洞穴に似た穴を見つけた。

ほんの少し興味をもつて、その洞穴に近づいた。

中は広いとも狭いとも言えず、オレ達の住んでいる洞穴よりは小さかった。

とりあえず、入る事はできたので、入つて中を調べてみた。

まず、見つけたのは……白骨死体。

なんだらか……海賊か何かでもやっていたのだろうか？

銃やナイフ等も落ちている。

と、その時だつた。

少し外からは一見見えにくい場所に、宝箱と何かの書き置きがあつた。

まあ、こんなとこに住んでるんだからお宝とかあつたって何の意味も無い……

とりあえず、書き置きを読んでみた。

どうやら、遺書らしき物のようだ。

『オレの名前はレーグ。とりあえず
腹が減った……

だが、ここの中にはいる獣はどれも強力……
オレなんかでは太刀打ちできないだろう
だから、オレはここを死に場所と決めた。
オレの乗っていた海賊船は、ある日、
他の海賊に襲われ、大破した。

海に放り出されたオレ達は必死に泳いで逃げた。
だが、途中で海王類に食われる者や、力尽きて
沈んでいく者もいた。

そんな中、オレは必死に泳いでこの島を見つけた。
上陸すると同時にオレは恐るべきものを見た……

森の中をゆっくりと歩く黒い毛並みをした狼……

狼なのに2足で歩き、体長は5m以上にも及ぶ……

2足で立っているからデカく見えるだけで

4足なら3mあるか、ないかだろ？……

だが、あの時、オレは恐怖で体がガタガタ震えた。

誰だつて、資料や図鑑でしか見た事のない生き物だったからだ。

神狼……神の使いとも言われている狼……フェンリル！

人間以上の知性を持つと言われ、体長は大きいもので5mを超えるフェンリルに人間が敵うはずがない……！

なぜ、こんな無人島にいるんだ！？

ひとまず、身を潜めているとフェンリルはそのままゆっくり歩き、姿が見えなくなつた。

とりあえず、助かった……

その後、オレは島の中を歩き続け、隠れれる場所を探した。

強力な獣達から隠れながら探す事になり、時間がかかつたがなんとか、この洞穴を見つけた。

中に入ると、この宝箱を見つけた。

だが、鍵がかかっており、こじ開けようと思つても無理だった。

……もはや、絶望的だった。

イカダを作ろうとしたつて、作ってる間に獣やフェンリルに見つかれば、食われるだろう……

もし、作れたとして、海に出ても海王類の餌食だ。つまり……この島からは脱出不可能……

よつて……オレはここを死に場所として選んだ……

最後に……この文を読んでくれた人がいるなら……

頼む。東の海のどこかにオレの家族がいる……

妻と子供一人だ。そして、会つたら……この遺書と遺骨を渡してほしい……

カエラ、ジース……海賊の道に走つちまつた愚かなオレを……許してくれ』

ここで、文は終わっていた。

あらためて、遺骨の方を見てみた。

頭蓋骨……右側の頭部に不自然な穴が開いていた。

どうやら、銃で自分の頭を撃ち抜き、自決したようだ。

とりあえず、オレはその頭蓋骨と遺書、宝箱を持ってガロウの洞穴へと戻った。

そこで、ひとまずガロウに説明をして、遺書と遺骨を置き、宝箱の方を開けた。

というか、壊した。

そして、中に入っていたのが……この唐草模様をした果物だった。

そして、今に至るわけだ。

ガロウが言うには

『悪魔ノ実』

といつ物らしい。

食べば、海の悪魔の力を手に入れるが、

その途端、海に嫌われ泳げない体になるそうだ。

と、うああっ…… ついで、オレは六式が使えるので別に泳ぐ必要なんて無い。

と…… いつ訳で、悪魔の力といつ物に興味を持つて食べた。

…… 非常にまずかった。

今まで食つたどんな物よりもまずかった。

その、あまりのまずさに腹の方もなかなか受け付けず押し戻そうとしたが

渾身の力でねじ込んで、なんとか食べ終わつた。

『食ッタカ。デ、ドンナ感ジダ?』

食い終わると、ガロウが聞いてきた。

と、うああっ、何か起きないか右腕を前に出して念じてみた。

そしたら……

ボツ……と

燃えた。黒く。

突然、右腕が黒い炎に包まれた。

「うああっ……?」

『！』

オレはあまりの出来事に驚き、ガロウはその変化に気づいてビックリして体を起こした。

そのガロウを見ると、めずらしく驚愕していた。

『ゾ……動物系神聖種！
ゾオンケイ シンセイシユ

カミカミ（神々）ノ実 モデル炎神！！
アグニ

ガロウが訳のわからん事を言った。

なに？炎神？

「どうしたの、ガロウ……？」

とりあえず、聞いてみた。

『動物系神聖種トイウノハ、悪魔ノ実ノ中テ最モ希少、
ソシテ最強ノ種ト言ワレテイル悪魔ノ実ダ。
ベルト、悪魔トイウヨリ神ノカラ得ルコトガデキル、
マサカ、コノ島ニアツタトハ……！』

あのガロウですら、驚きを隠せない。

それほど、希少な物だつたのだ。

まあ、そう思つてみるとガロウにツッコまれた。

『トロロテ、イツマテ腕ヲ燃ヤシテルツモリダ』

おっと、やうだつた。消すの忘れた……

つて、どうやって消すんだ?

とつあえず、オレは腕を振つてみたり、

息を吹きかけたり、水をかけたりしたが……消えなかつた。

まさか……と思い、黒炎を出した時と同じように消えると念じると

消えた。

悪魔の実とはこうやって使つのか……。

その後は、悪魔の実の能力を使いこなすための修行にはげんだ。

もちろん、2万本のパンチと6万本の蹴り、霸氣、六式の修行も怠らない。

能力の修行を行つてくうちに、この能力の特徴も分かつてきた。

まず、『相手を敵と認識しない限り、炎はその者に害を『与えない』』
といふ事だ。

何気なく、たき火をしようとした小さな木や

枯れ葉を集め、燃やそうと思ったのだが……

燃えなかつた。

何度も黒い炎を浴びせたが、一向に燃える気配が無く……

イラついてくうちに、もうハツ当たりのように黒い炎を放った途端

……

燃えた。

一瞬、ポカーンとしたが、すぐに気づいて、コツを掴んだ。

敵意……つまり、敵と認識しない限りは、この炎は人を傷つけない。

まあ、敵と認識すれば……絶大な威力を發揮するのだが……

その威力の原因……『熱量の調節』

炎というのは普通は『熱い』だろう。当たり前のことだ。

だが、この黒い炎……〇とか、マイナス何度の炎というのも可能なのだ。

つまり、燃やす事もできれば、相手を凍えさせることもできる。

ちなみに、今のオレで調節できる範囲は……

-300～1500度だ。

つまり、液体窒素と呼ばれる『-198度』よりも低く……

マグマの『800～1000度』よりも高くまで調節できるのだ。

まあ、ガロウいわく、鍛錬を重ねれば、調節できる範囲も広がるらしい。

とりあえず、修行だ。

ちなみに、この悪魔の実は『動物系ゾオンケイ』だ。

変身することも可能だ。

変身…獣人化した姿等は次回、説明しよう。

悪魔の実（後書き）

さて、動物系幻獣種イヌイヌの実 モナル・フェンリル
という実なんぞどうか・・・・・・と言つ発案をいただきました。
誠にありがとうございます。

ですが、この実に関しましては、他のキャラで使おうと思つて
おりますので、申し訳ございません。

さて、ここで少しがんかーです・・・
この物語の主人公アレスですが・・・・
海賊にしようか・・・海軍にしようか・・・
非常に迷つております。

よろしければ、意見、お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4446ba/>

ONE PIECE ~神狼に育てられし子~

2012年1月14日23時49分発行